名古屋学院大学論集　社会科学篇　第59巻　第3号　pp. 1–13

〔論文〕

福田敬太郎の経済社会思想

小　林　甲　一

名古屋学院大学現代社会学部

要　　旨

福田敬太郎（1896年～1980年）は，わが国の経済学・商学分野において「福田商学」と呼ばれた独自の学問体系を築き，神戸大学長を経て1964年に名古屋学院大学の初代学長に就任し，その後，長く学長・理事長を務めた。本稿は，こうした福田の学問的探究における思想的な背景や基盤に着目したうえで，その生涯と学問を振り返るとともに「福田商学」の体系と理念を概観し，商現象の核心である「取引」の意味，市場経済観と経済秩序構想および経済倫理の位置づけに焦点を当てて経済社会思想の根幹について考察するものである。そして，とりわけその商学が実践的経済倫理の学として構想され，それを通して現代の取引経済システムおよび市場制度や取引所を「改革」しようとしたものであることを明らかにする。目次構成は，次のとおりである。Ⅰ はじめに，Ⅱ 福田敬太郎の生涯と学問，Ⅲ「福田商学」の体系と理念，Ⅳ 経済社会思想の根幹と経済倫理，Ⅴ おわりに。

キーワード：福田敬太郎，商学，キリスト教，取引理論，経済倫理

Economic and social thoughts of Prof. Keitarou FUKUDA

Koichi KOBAYASHI

Faculty of Contemporary Social Studies
Nagoya Gakuin University

発行日　2023年1月31日

Ⅰ　はじめに

福田敬太郎（1896年～1980年）先生は，わが国の経済学・商学分野において「福田商学」と呼ばれた独自の学問体系を築き，神戸大学で学長職（1959年～1962年）を終えられたのち，1964年4月には名古屋学院大学の初代学長に就任され，その後，学長（～1974年11月）および理事長（1974年6月～1980年1月）を務められた。本稿は，こうした福田先生の生涯をかけた学問的探究における思想的な背景や基盤に着目したうえで，その生涯と学問を振り返るとともに「福田商学」の体系と理念を概観し，そして福田先生の学問的理念となっている経済社会思想の根幹について考察するものである。

こうして福田先生の業績に関心を持ったのは，名古屋学院大学に長く在職し，しかも先生の学問的な基盤と私の専攻分野とが重なっていたことによる。とはいえ，数年前までは，学問的先達というよりも，在職する大学の初代学長として身近に感じてきたという程度にすぎなかった。今回，改めて研究を深めようと思い立ったきっかけは，本学で高見伊三男教授のもと推進されている共同研究「日本におけるキリスト教教育―『敬神愛人』の系譜の探究―」である。私も，そのなかの「福田敬太郎研究会」の客員メンバーとして活動しており，したがって，本稿はこの共同研究による成果である。

本学の記録によれば，福田先生は，「学生時代に経済学者A. マーシャルの『人間の生活を根本的に動かすところの動因に宗教と経済がある』という言葉に深い感銘を受けた」とよく話されていたそうである。物心がついた時からキリスト者としての道を歩み始め，その後，経済学・商学を研究する道を志した先生は，まさにキリスト教と経済学の2つを1つのものとして追究されたのであろう。こうした想いから先生は，経済学説史や市場経済学の研究に打ち込んだのちに商業学として取引所論や市場論を専攻することとなったが，そうした経済社会思想に裏打ちされ，経済倫理にもとづいて構築された独自の商学体系は，戦後のわが国における商学分野において異彩を放ったのである。そこで，本稿では，福田先生が拠りどころとされたキリスト教的経済倫理にも焦点を当て，「福田商学」が持つ特色や独創性を浮き彫りにしながら福田敬太郎（ここからは，敬意を込めつつこのように表記させていただきたい。）の経済社会思想についてまとめてみたい。

Ⅱ　福田敬太郎の生涯と学問

(1) 略歴と学問的業績

福田敬太郎は，1896年（明治29年）に大阪市に生まれ，5歳のときに日本基督教会高槻講所にて幼児洗礼を受け，1913年には17歳で同茨木伝道所にて信仰告白をおこなった。こうして福田は，物心がつくとともにキリスト者としての道を歩み始めたのであり，長じて神戸高等商業学校に進学後しばらくして神港教会に転入して信仰生活を続けた。1929年には神港教会長老に任職し，その後，50年以上にわたり長老職を務めるとともに，戦後は日本基督教団から離脱した福音主義の一派である「日本キリスト改革派教会」を代表する信者として活動した。このように福田は，生涯をかけて神に向き合い，キリスト者としての道を究めようとしたのである。そして，後述するように，福田のキリスト

教信仰は，学問的探究の道やその方向にも決定的な影響を与えたといっても過言ではない。

神戸高商卒業（卒業論文「海上保険における再保険の研究」）後は，東京高等商業学校に進学し，福田徳三教授の下で卒業論文「Sir William PettyからDavid Ricardoに至る英国貨幣学説」をまとめたのち，1920年に神戸高商講師に着任し，1922年には同教授に昇任した。1924年から1928年までは文部省留学生として商業学研究のためにハーバード大学とケルン大学で研鑽を積み，ハーバード大学では「穀物取引における現物相場と先物相場に関する研究」によりMBAを修得した。そして，福田は，1929年に神戸商業大学助教授に就任し，1931年以降，戦前・戦中・戦後を通して1960年まで神戸商業大学，神戸経済大学および神戸大学経営学部の教授を務めた。また，その後は，前述したとおり神戸大学長，四国学院理事長（1963年～1970年），名古屋学院大学学長・理事長を歴任した。

福田の40年に及ぶ学究生活から生まれた研究業績の大半は，独自の商学体系の樹立と展開に向けられたものであり，それは「福田商学」と呼ばれた。退官に際して福田の門下生である荒川祐吉と平田日出夫がまとめた「福田先生の学問」（1960年9月）によれば，それは，「広く商学全般にわたり，とくに商品の社会的流通，資本力の社会的流通の二大領域において展開されている」。とはいえ，商業学を専攻し，主な研究対象を自由流通経済＝取引経済に定める以前には，経済学説史や経済思想に関する論考も著し，また，商学を経済学の一部門と位置づけ，取引理論を志向する商業学を展開するなかで市場経済学や市場政策に対する研究成果も残している。こうした部分に光を当てることを通して，福田の経済思想的・経済倫理的側面にアプローチすることができる。

(2) キリスト教信仰と学問

福田敬太郎によれば，「人間生活が他の動物の生活から区別される根拠は，実に合理的・精神的・文化的生活を持っていることにある。それゆえ，人間生活は常に理想によって指導され，最高価値の実現に寄与するところの一面を持っていなければならない。われわれが観察しようとする経済生活もまた，それが人間生活の一部である限り，たとえ非合理的•自然的•野生的生活と浅からぬ関係を持っているとしても，必ず人間生活本来の性質に適うところの理想追求的・価値実現的な生活でなければならない」。また，「経済生活は，人間の社会生活の一面であり，経済現象は，人間の交通関係の一つの現れである。したがって人間の交通関係である限り，経済もまた本質上一つの理想的指導原理に基づいて行われなければならないという倫理的性質を持っている。この経済生活の指導原理を名付けて，私は『商』と呼ぶこととする」。

福田は，「生活哲学への志向―市場経済学の基本問題」のなかで，若いころ経済学の勉強を志し，その後商学の研究を打ち込んだ根底には「生活哲学」があったと述べている。ここで生活哲学とは，「いかに生きるべきか」を探究するものであり，その根幹に絶対的価値をおけば，それは一種の価値哲学となる。後述するが，福田は，キリスト教学，文化科学および宗教哲学に依りながら独自の生活哲学を展開している。そして，それに従い，自らのキリスト教信仰から経済生活の価値とそのために求められる商の意義を見出したうえで，その価値実現のために経済学・商学という学問の探究にまい進したのである。

こうした福田の学問的探究は，キリスト教の立場からみると，どのように位置づけられるのであろ

うか。小野静雄によれば，キリスト教の文化理解に関してH. R. ニーバーが整理した5つの類型：①Christ against Culture：文化を否定するキリスト教，②Christ of Culture：文化とキリスト教の根本的一致〔融合〕，③Christ above Culture：キリスト教が文化の上に立つ〔支配的〕，④Christ and Culture in Paradox：文化とキリスト教が二元的に分離する〔ルターはここに入る〕，⑤Christ the Transformer of Culture：キリスト教的価値観による文化・社会の変革〔抑圧を伴わない〕のうち，福田敬太郎の取り組みは⑤の類型に属すると考えられる。このことは，キリスト教信仰における福田の立場，つまりピューリタン信仰や改革派教会の立場にも相通じるものである。

(3) 市場経済学から取引理論へ

福田敬太郎は，経済学の研究を志して東京高商に進学し，卒業後，神戸高商に教職を得て研究者の道を歩み始めるが，当時は，市場経済学のための理論的・学説史的研究に精励した。これには，指導教授であった福田徳三が大きな影響を与えたと考えられる。福田徳三教授は，わが国においてドイツ社会政策学・新歴史学派の流れを汲む代表的な学者として，しかも貧困・失業問題に取り組んだキリスト者としてそれらの問題を緩和できる経済社会の形成に向けて経済学や社会政策を構想すべきと説き，自由と民主主義を尊重する立場から国家の政策介入による社会問題の解決を主張した。他方，福田敬太郎が志向した市場経済学は，今日のミクロ経済学のようなものではなく，いかにすれば市場経済や市場取引を育成し，健全に発展させることができるかについて探究するものであり，そのために経済主体倫理規範や政府の政策理念をも考察対象とし，それによって自由と社会的公正を原則とした経済社会の構築をめざしたのである。経済思想あるいは社会政策思想からみて，福田が，福田徳三教授の薫陶を強く受けていたことはまちがいない。

神戸高商での研究活動も軌道に乗り，欧米への留学を考えるころになると，福田は，そうした市場経済学への志向を市場経済の基盤である自由流通経済の根幹をなす「取引」に対する学問的関心へと深化させていくことによって，自らの専攻分野を経済学から商学へと大きく移していった。そして，その後は，取引の理論的解明すなわち「取引理論」に対する研究を基本に，自由流通経済における取引を通して展開する生産物の社会的流通を研究対象とする「配給論」とそうした取引の場としての取引市場や取引所に関する理論的・制度的・政策的研究としての「取引市場論（取引所論）」に没頭した。著作目録によれば，1919年から1959年のあいだに著書25冊ならびに約130本の論文を著しているが，その大部分はそうした配給論と取引市場論に関するものである。

周知のように，商学は，流通論，会計学，マーケティング論，経営学など各論ばかりが目立って原理論がなく，その総体を体系的に捉えることがむずかしい学問分野である。その商学の主要な一領域である「商業学」に係る専門的分化発展について，福田は，①配給論（マーケティング論）の展開，②経営学の興隆および③取引理論への志向があることを踏まえたうえで，自らの商学を③のアプローチを示すものと位置づけ，独自の体系と理念にもとづき，以上のような取引理論，配給論および取引市場論に関する研究を進めることを通して福田商学の構築と展開をめざしたのである。

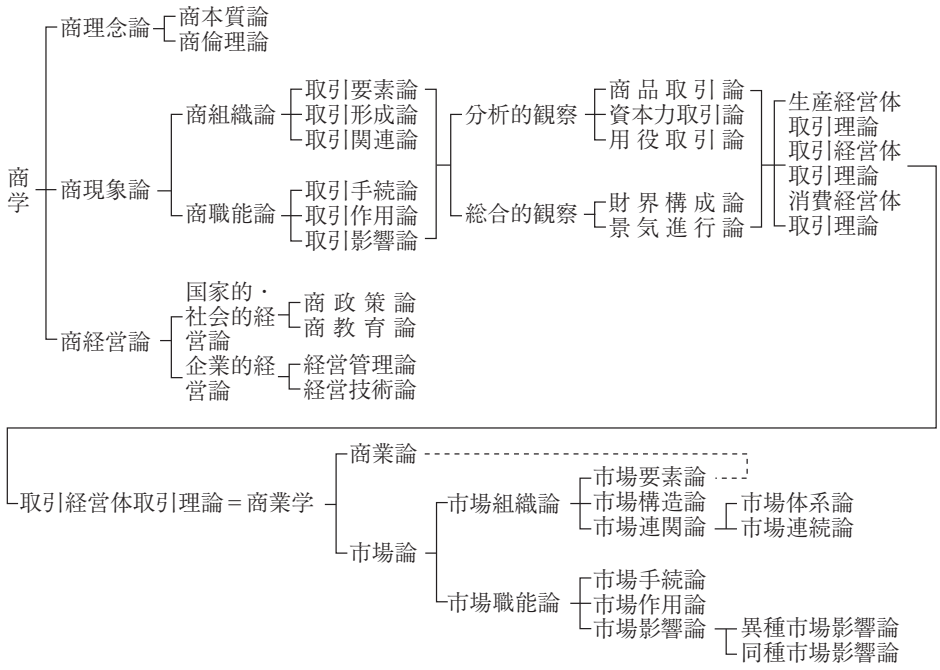
Ⅲ「福田商学」の体系と理念

ここで福田敬太郎が積み上げた学問的業績の核心である「福田商学」の体系と理念について紹介したいと思うが，残念なことに，私は商学についてはまったくの門外漢である。また，本稿の目的は，その根底にあり，学問的理念となっている経済社会思想の根幹を明らかにすることにある。そこで，以下では，荒川・平田による前出の「福田先生の学問」ならびに名古屋学院大学『故福田敬太郎先生追悼論文集』（1981年1月）に寄せられた荒川の「福田先生の人と学問」に従って福田商学の体系と概要を紹介する。そして，そのうえで，その根本にある「商の道理」について明らかにしたい。

(1) 広義の商学，狭義の商学および商業学

荒川によれば，「福田商学の真髄は，その独自の『商』概念の構成にある。『商』は3つの次元の統合である。3つの次元とは1）道理としての商，2）現象としての商，3）経営としての商である」。したがって，商学も，経済学の一分野としてそれと同様に目的科学であるとともに現象科学であることを考えれば，目的科学としての商学すなわち「広義の商学」は，それぞれの次元に応じて①商理念論（目的科学としての商学），②商現象論（現象科学としての商学），③商経営論（商政策論）の3つによって構成される。こうした福田商学の体系は，以下のように図示することができる。

「福田商学」の体系



（荒川が福田敬太郎『商学原理』をもとに作成）

1）道理としての商においてその根幹となる理念についてはあとで述べることとして，福田商学において広義に対して「狭義の商学」を担うのが「商現象論」であり，これは，「商組織論」と「商職能論」を柱とし，商品・資本力・用役（サービス）を対象とした取引経済を観察することを旨としたものである。この商現象論：現象科学としての商学は，すでに述べたように取引理論にもとづいて構築されている。荒川によれば，福田商学における「取引」とは「厳密な価値計算に基づくところの等価関係を実現しようとする努力を伴う給付・反対給付」であり，そこでは生産―取引―消費という3つの経済局面における各経営体の取引理論が展開される。

福田商学においては，商現象論における「取引経営体取引理論」こそが「商業学」であり，これによって商業学は,「経営学とも配給論とも異なる独自の専門科学として樹立される基礎を与えられる」ことになる。さらに，商業学は，1つの商業の組織と職能を研究する「商業論」と，1つの商業が他の商業その他の経営体と取引関係を結ぶ場を研究する「市場論」とに分けられる。福田は，従来の商業学が内包的研究である商業論ばかりに沈潜してきたことを批判したうえで，外延的研究としての市場論によって市場に関する理論的・体系的研究を推し進めるべきであると主張し，商の道理と正しい取引経済の実現のためにはこのような市場論体系の展開が不可欠であると説いた。そして，商現象論では取引主体としての経営体の観察に重きがおかれるが，市場論においては取引経済の対象である商品・資本力・用役（サービス）に対応して商品市場論，資本力市場論および用役（サービス）市場論の展開が要請される。福田が配給論と並んで証券市場論や各種の商品市場論の研究に注力したのはこうした商学の体系と理念にもとづいてのことである。

(2) 配給論と証券市場論

荒川・平田によれば,福田敬太郎の商学研究は特に「商品の社会的流通」と「資本力の社会的流通」という2つの領域において展開されており，生産物あるいは商品の社会的流通に関する観察で大きな役割を果たしたのが「配給論」である。すでに述べたとおり，取引理論を志向したことが福田商学の理論的側面が持つもっとも重要な特質であるが，わが国ではきわめて早い段階から商学による配給論を展開したことも福田の大きな功績であった。配給論には，本来，市場配給だけではなく計画配給や統制配給も含まれるため，自由流通経済を基本とする商学体系にそれをそのまま組み込むことはむずかしい。また，配給論の対象は生産物あるいは商品であり，資本力やサービスはそれから除外されるため，商品以外の取引にも観察の眼を向けようとする商学体系と配給論とは相容れない部分を持っていた。しかし，福田は，アメリカのマーケティング論に触発されるかたちで商品市場論における市場システムの考察を取り入れながら「市場配給論」を推し進め，その後は市場配給も含めて①配給経済の基礎概念，②配給組織，③配給経営，④統制配給および⑤計画配給という5つの側面からなる配給論の体系を構築した。

福田の配給論研究について特筆すべきは，農産物配給に関する業績である。ハーバード大学留学中に執筆された論文は穀物取引の現物取引と先物取引に関するものであり，福田は，その後も戦前・戦中から戦後にかけて一貫して農産物市場や農産物配給に関する研究業績を数多く著している。むしろ，福田の市場論と配給論は，こうした農産物に関する研究を中心に展開されたと言っても過言ではない。

また，わが国における中央卸売市場開設期に大きな論議を巻き起こした「卸売人単複問題」では，きわめて明快な論理によって「卸売人は単数たるべき」と主張した。加えて，戦時下の統制経済における食料統制や配給統制の研究は，福田の学問的関心を農業政策一般へと発展させたのである。

福田商学が商学および商業学においてもっとも大きな研究成果をもたらしたのは「市場論」の分野であり，そこでは取引理論にもとづく市場システムの研究と並んで，証券取引所・証券市場，金・銀取引所，商品取引所，商品先物市場および中央卸売市場などさまざまな取引所や取引市場に関する考察が展開された。とりわけ，資本力の社会的流通に係る取引を担う「証券市場」に関する研究業績はぼう大な数にのぼり，福田の著作目録のなかでもっとも大きな位置を占めている。

福田は，証券市場に関する諸研究が体系的な学問的アプローチとしては不十分であり，特にそれが取引所論，企業金融論あるいは投資論のいずれかに偏ってきたことを批判したうえで，証券市場に関わる現象や問題を全体的に捉え，包括的に研究しようとした。生産―消費―貯蓄―投資―生産という一連の経済プロセスにおいて生じる証券市場現象を統一的に秩序づけて観察し，有価証券制度から始まり証券の供給，需要および流通さらには証券市場政策にわたる全般的な問題について所説を展開した。証券市場の研究では，なかでも有価証券の意義とその制度的な生成発展，証券資本主義の現代的特質，証券発行・分売組織とその機能，証券投資と証券投機の理論的・実証的分析，証券価格と投資価値の問題，投資者保護，投機統制の問題などが論点となった。

(3) 道理としての商とその理念的基礎

これまでは広義の商学からそのまま狭義の商学⇒商現象論，そして取引経営体取引理論⇒商業学へと立ち入ってきたが，ここで改めて目的科学としての商学（広義の商学）体系の土台たる「商理念論」ならびにその下にある商本質論・商倫理論について言及しておきたい。これまでみてきたように，福田敬太郎は，その商学体系を構成する商現象論としての商業学においてさまざまな特色ある所説を展開したが，「福田商学」の真骨頂は，それらが独自の商理念論にもとづいていたことにある。

福田は，商学の究極の対象たる「商」の意義を見極めるために，その基盤である経済生活に立ち返り，さらに人間生活から論じようとする。先で述べたように，福田によれば，人間生活は合理的・精神的・文化的であり，それゆえに人間生活も経済生活も常に理想によって指導され，理想追求・価値実現的なものでなければならない。また，人間生活には常に個人と社会の両面があり，どちらもがそれに関わってくるが，それでも理想追求・価値実現が社会生活のなかにあることが大切である。そして，「およそ社会は，人間の交通関係から成立するところの目的構造である」。「……社会は，それゆえにその本質において倫理的である。その意味は，社会の中に，あるいは『愛』ととなえ，あるいは『和』と呼ぶところの一つの理想的指導原理があって，それのみによって人間の一切の交通関係が円満になり，社会構成の目的が達成され得るものであるということである」。商の道理は，こうした社会においてのみ確実に認めることができるのである。

福田は続けて述べる。人間は，生物学的要件として必要な生活物資の獲得調達に努めなければならないのであり，経済とはそれを整えるための社会関係のことにほかならない。しかも，それは決して個人的な事実ではなく，それによって欠乏を除去することで人格的自由を保障し，社会の平安と福祉

を招来する富を増進するものであり，ここに経済の意義がある。また，これも先に述べたように，社会生活としての経済生活は，人間の交通関係のもとで理想的指導原理にもとづいて行わなければならないという倫理的性質を持っており，その指導原理こそ「商」と呼ぶにふさわしいのである。すなわち，道理としての商は，「社会生活の一般的指導原理であるところの和または愛の一面」であり，「経済的相互扶助の根本精神」である。したがって，経済と倫理を分けて理解しようと試み，経済を自利心の飽くなき発揚と，いっさいの取引を利得欲求の追求とみなすのは無意味であり，「むしろ経済現象の背後に横たわるところの生存競争という生物学的事実を眺め，取引の根底に伏在するところの自利心を悟ることによって，初めて経済的交通のために道理としての商が存在しなければならないものであるということを知るのである」。

Ⅱの（2）キリスト教信仰と学問でもふれたように，以上のような商理念論の根底にはその理念的基礎としてキリスト教に依拠した生活哲学が横たわっていることは言うまでもない。福田は，「いかに生きるべきか」という生活哲学の中心課題にたどり着く前に「なぜ生きなければならないか」という問題を通過しなければならないとし，この問いに対して，自らの所信を次のように言い表す。「私は，人間が生活しなければならないのは，神が人類を創造されたためであって，したがって宇宙の一部分において存在して神の栄光をあらわすためであると信ずる。ここにおいて生活哲学の根本原理には，直観と信仰が必要であることがわかる。生きるためには，信ずることが必要である。生活は信仰である」。さらに続けて，「それは，われわれが生きなければならない理由は，われわれが理想的に生活することを神によって命ぜられたからである，ということである。これを生活哲学における至上命令と名付けることができる。ゆえに，理想的生活をすること自体に価値があるのである」と福田は説くのである。

このような独自の生活哲学にもとづいて商学・経済学を構想し，展開したとなれば，当然，社会科学における価値判断の問題を看過することはできないが，福田は，キリスト教的価値観を絶対的に位置づける価値哲学に依拠した社会科学の立場に立っていた。荒川・平田は，そこにH. J. リッケルト等の「文化科学」からの影響を指摘しており，また，恩師 福田徳三教授によるドイツ新歴史学派の経済学方法論を継承していたとも考えられるが，ここではそのあたりに深く立ち入ることは避けたい。ともあれ，経済生活および商の道理に関する福田の所説は，こうした生活哲学に導かれたものであり，そして福田商学は，以上のような理念的基礎にもとづいて構築されているのである。

Ⅳ　経済社会思想の根幹と経済倫理

以下では，これまでみてきた福田敬太郎の学問的業績ならびに「福田商学」が持っている特色や独創性を経済社会思想の視点からより明確にするために，福田が商現象あるいは商行為の核心とみた「取引」の意味，福田の市場経済観と経済秩序構想，および福田による経済倫理の位置づけについてさらなる考察を加えておきたい。

(1) 人間の経済と「取引」の全生活的意味

福田によれば，人間の経済とは，生活に必要な物資の獲得調達を整えるための社会関係であり，そこでは多様なかたちで物財が人と人のあいだを移動する。このような経済には，生産，消費，分配，交換，流通，売買などさまざまな局面があるが，人と人のあいだの物財の移動は，そのときどき，その場その場でさまざまな意味を持ち，さまざまな規則や手法に従って展開される。福田は，近代以降の経済における関連事象を視野に入れつつ，人類史，交易史，市場史，商業史および経済史における関連資料を渉猟することを通して交易(trade)，分配(distribution)，交換(exchange)，流通(circulation)などに対する考察を重ね，そこから商学の体系化に当たってキー概念となる「取引」(transaction)ならびに商業学の理論展開で重要となる「配給」概念を導き出した。とりわけ取引は，そうした物財の移動を現代の経済においてもっとも一般的に表現できる概念であり，福田商学の構築はこうした取引の理論的解明から始まったのである。

福田によれば，「商の現象は，『取引』の中に現れる。」「取引とは，己れの外に与えるところの物と，他の己れに授けるところの物との価値を比較して，権威に脅かされず，情実にこだわることなく，冷静な方程式の上に立って数値的に緻密性を守りながら，共に計らって互いに納得した上で行うところの交易関係である」。こうした「取引」を根幹に体系を構築したことが，福田商学の有する理論的特色であるのは言うまでもないが，さらにその取引を経済生活のなかに位置づけ，しかもその全生活的意味から説き明かそうとするところに大きな理念的意義があるのである。福田にとって取引は，経済生活における物財の移動である以上に人と人の交通関係であり，それゆえに社会生活のなかにあり，そして全生活的に意味づけられるべきものにほかならない。それは，通常の経済学や商学がそれを経済生活のなかに封じ込め，たとえば市場であれば交換というように，特定の場や局面にはめ込んで意味づけるのとは対照的である。

これによって，商学の観察対象である取引を自利心や利得欲求だけから捉えるのではなく，商の道理や経済倫理も含めより幅広い，理念的で本質的な観点から商現象を把握することを可能にしているのは確かだが，このことがわが国の関連する学界において福田商学を孤高の立場に押し上げているのはまちがいない。しかしながら，このことが，商学が経済学における一応用分野としてだけではなく，社会科学において一つの確固たる学問分野としての地位を獲得するうえで欠くことのできない取り組みであったことを看過してはならない。加えて，近年，商学・経営学ならびにビジネス世界では企業倫理や経営倫理の問題がよく取り上げられており，社会的にも経済倫理に大きな注目が集まっている。こうした問題意識から，福田商学の現代的意義に思いを巡らすこともできるであろう。また，経済学の理論や思想との関わりでは，こうした福田商学の理論と理念は，市場交換を通時的—共時的に相対化させることによって現代の経済学に大きなインパクトを与えた経済人類学的アプローチと相通ずるものがあると考えられる。人間の経済と経済生活が，ますます多様な規則や要素によって，多元的なプロセスやチャネルを通じて必要な生活物資の調達を担っている現代社会において，福田による一般化された取引理論とそれにもとづく福田商学が有する射程は大きく広がっている。

(2) 多元的経済秩序による自由流通経済の促進

福田商学では,「商経営論」が商政策論であり，そこでは国家的・社会的経営論としてそれが展開される。また市場論では，取引経済の対象である商品・資本力・サービスが商の道理にかなうよう正しく適切に配給され，流通され，調達されるために必要な制度と政策について考察されている。とりわけ商品・先物市場，中央卸売市場，証券取引所および農産物市場に対して積極的な政策提言が行われている。福田が研究者として活躍した1930年代から50年代にかけては,戦時体制から太平洋戦争,終戦・戦後復興から高度成長へと推移したまさに激動の時代であり，わが国の経済体制も，統制経済から戦中・敗戦直後の混乱そして自由市場経済と国家の積極的介入・幅広い経済社会政策による混合経済秩序へと大きく，かつダイナミックに移り変わった。しかしながら，福田は，そうしたなかでも商の道理にかなった取引経済の育成に向けて自らの政策理念を貫き通したのである。

経済政策として本質的なことの1つは,市場と競争秩序および市場の失敗や限界への対応であるが,福田はこれらについてどのように考えたのであろうか。その商学体系における基本は取引経済であり,「自由流通経済」である。したがって，商学の目的は自由流通経済をめざすことにあり，市場政策の基本理念もそうした商の道理を実現できるよう自由流通経済を促進することである。ここで，商学の対象としての市場と経済学の理論的基礎である「市場」とが異なっているのはもちろんだが，福田が強調する自由流通経済はいわゆる「自由市場経済」ではない。それは，商品などが正しく適切に配給され，流通され，必要に応じて自由に調達できる取引経済のことを指す。その意味で，統制経済においても自由流通経済を維持することはできるが，その価値を実現しやすいのはやはり自由市場経済の方である。しかし，市場経済でありさえすれば必ず自由流通経済を確保できるわけでもなく，そこには市場の統御を通して自由流通経済を促進する努力が必要になってくる。「市場制序の理論」において福田は,「市場経済は，……全く無政府的な組織ではない。……物財の流通に対する市場の『制序作用』(Ordnungsfunktion)。今日の市場経済は，一つの秩序の中に運行して一つの制度を形造っており，……。換言すると，今日の市場経済の各構成員は，市場制序によって支配されている」と述べている。つまり，商の道理にも照らすと，市場経済は，国家による政策的介入も含め多様な整序要因を通じて統御されてこそ，自由流通経済を促進する秩序となりうるのであり，そのために，それは社会生活のなかにあって倫理的・精神的基盤によって支えられなければならないのである。

こうした福田の市場経済に対する考え方は,戦後ドイツの経済政策思想における「オルド自由主義」の系譜，なかでもW. レプケやA. リュストウに代表される「社会学的新自由主義」の立場に近い。また，それは，福田の恩師である福田徳三教授の立場に相通ずるものでもある。レプケによれば，旧自由主義は市場経済を自然にまかせておのずと実を結ぶ「自生植物」のように考えていたが，それは誤りである。市場経済はむしろ「栽培植物」であり，それが育つためにはそもそも①自律した生活形成を営もうとする人びとの精神，②競争秩序を形成・維持するための積極的な国家政策，③権威を持った強い国家などを必要とするものなのである。ただし,その一方で福田は,戦後『協同主義経済』(1949年）を著し，わが国の経済社会において商の道理を促すためには各種の協同組合を積極的に設立し，協同主義の経済を構築する必要があると説いた。つまり，自由流通経済を促進するうえで，まずは自由を基調とした市場経済の原則と制度を確立することが不可欠であると確信していたが，そこで商の

価値を追求するには，市場一元論ではなく国家の介入だけでもなく，それら以外にも多様な要素を組み込むことを通して商の道理の下で協同的に統御されるような経済秩序の実現をめざすべきとしたのである。こうした考えの根底には，自由，公正そして協同をも包み込むキリスト教的社会観に通ずるものがあると思われる。商の道理にふさわしい，自由流通経済を促進できる「多元的経済秩序」の構築，ここに福田商学を基礎づけた経済政策思想の核心がある。

(3) 経済倫理としての商の理念

福田敬太郎による学問的探究のバックボーンにキリスト教信仰があることは繰り返しふれてきたが，その経済社会思想の根幹，あるいは福田商学の根底にある経済倫理についてはピューリタン信仰，とりわけそれを代表するR. バクスター（1615～1691年）に言及しないわけにはいかない。バクスターは，ピューリタン革命から内戦そして王政復古後の混乱するイングランドにおいて国教会に反対するプロテスタント諸派のあいだで教会一致運動を推し進めた牧師であったが，彼は，キリスト教諸派における神学上の争いを超えて民衆にキリスト教の教えを広めるため，基本的な教義をわかりやすく記した書物をいくつか著した。そのなかの『キリスト教指針』（1673年）は，当時の人びとが個人・家族・教会・支配者および隣人に対しての各場面でキリスト者として果たすべき義務・実践倫理についてまとめたものであるが，M. ウェーバーは，あの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904～05年）においてその生活形成に関する要領をピューリタニズムの世俗内禁欲にもとづく経済倫理として注目し，資本主義の精神に適合するプロテスタンティズム的職業倫理の典型に位置づけたのである。福田は，学究生活を始めた頃に「清教倫理的経済思想：リチャード　バックスターの研究（1）・（2）」（1922年）を発表しており，そしてこの論考は，後年，『商学原理』にも重要文献の1つとして再録されている。

福田は，その論考のなかでバクスターの生涯と働きを振り返ったのち，『キリスト教指針』に従い，「時の償いと勤勉」，「ピューリタン的労働観と職業倫理」，「財の獲得と富の蓄積」，「財の交換と売買」に関する倫理ならびにそこにある博愛・正義・慈善の思想について解説や注釈を加えている。そして，「ピューリタン的経済思想の力の及ぶ限り，すべての事情において，経済的合理主義の生活実行の傾向を助長したことは，単なる資本形成を助長したことよりも，また社会連帯思想を促進したよりも，はるかに重要である」と結論づけたうえで，最後に，経済的繁栄を極めるアメリカにおいて，また資本主義的経済制度の頂点にある取引所で一部にピューリタン的精神が作用しているにもかかわらず経済倫理を逸脱した個人の営利行為が蔓延っていることを憂いている。そこからは，バクスターの倫理的思想に共鳴しながらも，そうした事態に大いなる疑念を抱き，人間の商行為に対して，あるいは取引経済において経済倫理的理念を取り戻すにはどうすればよいかという本質的な問いに向き合おうとする若き日の決意に近い心持ちを感じざるをえない。

梅津順一の『キリスト教指針』訳出抄録によれば，バクスターは，取引一般に関して次のような指針を示している。「・あなたの心の中には二つの重要な正義の原則が，深く習慣的に根付いていることを確認しなさい。すなわち，隣人への真実の愛とあなた自身の否定です。一つの格言で言えば，あなたの隣人をあなた自身と同じく愛しなさいということです。・あなたが他者と取引するときには，

相手が私であれば私がどのように取り扱われたいかを，よく問いかけるようにしなさい。• あなたの隣人の状態をよく理解し，彼の必要と利益とを考えなさい。• あなた自身の利益よりは公共の益を尊重しなさい。•［質問］私は私が取引する人が，私と同じように利益を上げるように努めなければなりませんか。［答］もしもあなたがたが同じような必要な状態にあり，同じような生活状態であれば，そうしなさい。しかし，相手が非常に貧しく，あなたが富裕であれば，正義に慈愛を混合させ，あなたよりも相手の利益になるように努めなければなりません。……もしも，あなたが貧しく相手が富裕であれば，あなたが利得を得たいと考えることが出来ます。ただし，あなたは他の人のものを欲しがってはならず，相手を害そうとしてはなりません。相手が慈愛を持って取引する能力があるときには，相手の慈愛や親切を期待することができます。」福田が措定した「商の道理」を基礎づける理念が思い起こされる。

福田商学の根底にはキリスト教的経済倫理があり，そのことが経済社会思想の根幹をなしているのは言うまでもない。しかし，こうして倫理的経済思想に軸足をおき，福田の思索を振り返るように考察を深めてくると，ただ「福田商学」が経済倫理的側面を持ち，それによって独創的で異彩を放っているというだけにとどまらず，福田商学そのものが経済倫理の体系として意図されたのではないか，という思いにいきつく。つまり，福田において商学は，経済倫理としての商の理念を追求し，その価値を実現するためにあり，しかも「福田商学」はそれを通して現代の取引経済システムおよび市場制度や取引所を「改革」しようとするものであったとみることもできる。少なくとも，福田敬太郎の学問的探究をその経済社会思想の発展と深化のなかにおき，道理としての商学の理念と体系を見直してみると，そのように思えてならない。その意味で，「福田商学」は実践的経済倫理の学として構想されたと考えてもよいのではないだろうか。

Ⅴ　おわりに

> **私は，既にそれを得たというわけではなく，既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち，わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ，後ろのものを忘れ，前のものに全身を向けつつ，目標を目ざしてひたすら走ることです。**
>
> （「フィリピの信徒への手紙」3章12節～14節）

聖書「フィリピの信徒への手紙」のなかにあるこの一節は，使徒パウロが，キリストを信じるとは何か，それを得るためにはどうすべきかを説いた箇所であり，福田敬太郎先生が好んで引かれた聖句である。「……何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです」。「なすべきことはただ一つ，……目標を目ざしてひたすら走ることです。」福田先生は，これを信仰の支えとし，生活のクレド（信条）として神に向き合った生涯を送られたと伝え聞いている。市場経済学から取引理論へ，そして商学の体系化と商業学の展開という道のりであったにせよ，学問的探究に対しても福田先生はまったく同じ信念を持ちながら，キリスト教的経済倫理の下に商学

の理念と体系を構築し，それによって経済社会の改革を促すという目標を目ざしてひたすら走られたのである。福田先生が創られた大学に長く在職し，学究生活を過ごすことができたことを誇りとしつつ，畏敬の念をもってこのことを心に刻みたい。

参考文献・資料

福田敬太郎『商学原理』，千倉書房，1966年
第1章　商の意義
第1節　道理としての商
補論　Ⅰ　生活哲学への志向
補論　Ⅱ　商の原義
第2節　現象としての商
補論　Ⅳ　ピューリタン倫理的経済思想
—リチャード　バックスターの研究—
補論　Ⅴ　原始配給論
第3章　商業の発展傾向
補論　Ⅶ　市場制序の理論
福田敬太郎『協同主義経済』，霞ヶ關書房，1949年
荒川祐吉・平田日出夫「福田先生の学問」，国民経済雑誌　第102巻第3号，1960年
矢村研一編『目標を目ざして一心に走る—福田敬太郎葬儀録』，日本キリスト改革派神港教会，1970年
名古屋学院大学編『幽玄啓明（福田敬太郎先生を偲んで）』，名古屋学院大学，1970年
荒川祐吉「福田先生の人と学問」，『故福田敬太郎先生　追悼論文集』，名古屋学院大学，1971年
梅津順一『ピューリタン牧師バクスター—教会改革と社会形成』，教文館，2005年
小野静雄『福田敬太郎—神に向き合った生涯』，名古屋学院大学宗教部　チャペルブックレットNo. 21，2018年